

氏名（本籍）	ヨシ カワ フキ 吉川 文（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第34号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉15世紀初頭の多声ミサ曲 ～組ミサとミサ・サイクル～

論文審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	角倉 一朗
（副査）	”	”	（ ” ）	船山 隆
（ ” ）	”	”	（ ” ）	上参郷 祐康
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	土田 英三郎
（ ” ）	”	”	（ ” ）	片山 千佳子

（論文内容の要旨）

多声ミサ曲は、ルネサンス期に最も隆盛した音楽形式である。その華々しい発展は初期ルネサンスの巨匠ギヨーム・デュファイ Guillaume Dufayの手により完成した循環ミサ曲から連綿と続いていく。しかし、通常音楽章をまとめあげた多声のミサ・サイクルの萌芽は既に、中世末の14世紀にギヨーム・ド・マショー Guillaume de Machautの書いたノートル・ダム・ミサ曲に認められる。だが、マショーのミサ曲、及びその他いくつかの14世紀のミサ・サイクルとデュファイの循環ミサ曲は、時間的にも、音楽的な内容の点でも大きく隔たっている。本研究の目的は、このちょうど中間に位置する15世紀初頭、多声ミサ曲の成立に向けてどのような展開があったのかを探求することにある。これは、中世からルネサンスへの転換期に、音楽がどのように発展したのかを問うこととも重なり合う。

この時期のミサ曲を考える上では、2つの楽章を対にした組ミサが重要な存在である。この頃から、ミサ楽章を所収する写本において、楽章の整理、配置の仕方に新しい傾向が現れる。14世紀には各楽章をそれぞれ同じ種類のもの毎にまとめて筆写することが多かったが、15世紀以降、異なる楽章を組にして、あるいはまた5楽章の揃ったミサ・サイクルとして筆写する写本がいくつも出てくるのである。ここに現れる組ミサやミサ・サイクルでは、楽章どうしを関連のあるものにするために様々な手法を用いている。こうした中から、後の循環ミサ曲のように音楽的統一体をなす多声ミサが生まれることになる。組ミサやこれと同時期のミサ・サイクルが、後の多声ミサ曲に対して非常に重要な位置をしめることは、今までにも十分認識されてきた。しかし、そこで重視されてきたのは、組ミサやミサ・サイクルとして作曲された作品であることが多かった。この時期の写本には、冒頭動機的手法なども利用した密接な関係にある組ミサ、ミサ・サイクルもあるが、その一方で作曲時には無関係だった楽章どうしをまとめた組やサイクルも多い。写本

編纂時にまとめられた組ミサ、ミサ・サイクルは、楽章間の音楽的結びつきも弱く、研究対象とされてこなかったのである。しかし、典礼において本来はばらばらの位置にある通常文楽章をなぜまとめりとして扱うようになったのか、組ミサやミサ・サイクルはなぜ起こってきたのかという問題を考える場合、作曲者の意図だけではなく、写本を編纂する側の視点にも配慮することによって、多声ミサ曲の成り立ちを、より多角的に捉えることができる。

本研究ではこうした視野に立って、15世紀初頭の組ミサ、ミサ・サイクルの代表的写本であるボローニャのQ15写本を取り上げた。この写本は、この時期のミサ曲のレパートリーを数多く収めた大部の写本であると共に、ミサ楽章を組やサイクルとしてまとめようとする編纂者の方針を明確に示している。この写本に現れる組ミサやミサ・サイクルが、どのような点に留意しながら関係づけられているのか、それが作曲者によるまとめりか、編纂者によるものか、さらに両者の意識に違いがあるのかといったことを個々の楽曲の分析を通じて検証していく。数多くの組やサイクルの中で具体的に対象として取り上げたのは、Q15写本において最も多作で重要な位置を占めるデュファイ、ヨハネス・デ・リンブルジア Johannes de Lymburgia、アルノルド・ド・ランタン Arnold de Lantins、ヨハネス・チコニア Johannes Ciconia、アントニオ・ザカラ・ダ・テラモ Antonio Zachare da Teramo の作品である。

彼らの関わった組ミサ、ミサ・サイクルでは楽章間を結びつけるために様々な趣向が凝らされている。作曲の時点でまとめりを意識していたものには、冒頭動機その他の印象的な楽句を共有したり、音楽的な面での強い結びつきを示すものも多い。一方、編纂時にまとめられたものは、結びつきが希薄であることが多いのは否めない。しかし、典礼上の機能や声部構成を同じくするものをまとめようとの配慮は多くの組に認められる。時にはさらに音楽的内容に踏み込んでの関連づけも試みられており、編纂者の側に楽曲に対する深い音楽理解があったことを示している。楽章をまとめようとする編纂者の意識には作曲者の意識と共通する方向性があったと言える。特に、ミサ・サイクルをまとめる場合のアプローチには、作曲者、編纂者双方に共通する方向性が最も顕著に現れている。

作曲者の異なる作品を集め、ミサ・サイクルにまとめ上げようとするとき、編纂者がサイクルの核としたのはグロリアとクレドの組ミサである。この2つの楽章の関係を芯にして、他楽章へと結びつきを広げていく。これは、チコニアやA.ザカラの組ミサを核としたミサ・サイクルにおいてははっきりと見られる特徴である。これに対し、Q15写本にはデュファイ、リンブルジア、A.ランタンがそれぞれ作曲の時点でまとめりを意識していたミサ・サイクルもある。これらのサイクルでも楽章間の結びつきを検討してみると、グロリア、クレドの2楽章が、サイクル全体としてのまとめりの中で核となる重要な位置を占める。

2楽章を対にする組ミサ自体、そのほとんどがグロリアとクレドの2楽章をまとめたものである。Q15写本ではこの傾向が特に顕著だが、これはこの写本に限ったことではない。ミサ楽章を組ミサやミサ・サイクルとして扱っていない写本でも、グロリアとクレドの2楽章が数の上で他の楽章を圧倒している。15世紀のミサ曲の発展を見ていくためには、この2楽章が突出した存在となっていた背景も考える必要がある。

典礼の面から考えると、この2つの楽章は重要な祝祭日や主日に多声楽曲として歌われるものだったということがある。その他の通常文楽章がどのようなミサにおいても不可欠な要素であっ

たのに対し、大規模なミサにおいて取り上げられる機会の多いこの2楽章は、多声化にあたってより多くの関心を集めたのだろう。さらに、グロリアとクレドは他楽章よりもずっと長いテキストを持ち、その構造にも他とは際立った違いがある。もうひとつ忘れてはならないのは、この時代の実際のミサ曲の担い手に関する問題である。本来会衆歌であったグロリアとクレドに複雑な多声楽曲が増えてきたのは、その担い手として優秀な聖歌隊があったことを示唆する。特にこの頃には、有力諸侯が私的にチャペルを持ち、そこに有能な音楽家を集めたのである。15世紀初頭において、グロリアとクレドが特に目立った存在となったのは、こうした様々な理由が複合的に絡み合っている。

グロリアとクレドに留まらず、ミサ通常文楽章全体にサイクルとしてのまとまりを求めるようになった一因として、随意ミサVotive Massの発展、特に聖母マリアに捧げられたミサが非常に盛んであったことが考えられる。教会暦に準じた日々のミサとは別に、聖母に対するミサが毎日のように行われるようになったため、そこで必要とされるミサ楽章をまとめようとの動きが出てきたのである。実際、この時期の組ミサやミサ・サイクルは聖母マリアと関わりのあるものが数多い。

15世紀初頭に組ミサ、ミサ・サイクルが写本の中ではっきりと形をとるようになったのには、典礼における慣習やミサの挙行のあり方などが様々な影響を与えたためと考えられる。しかし、作曲の時点でまとまりが意識されたものにせよ、編纂者がまとめたものにせよ、組ミサやミサ・サイクルの楽章間には音楽そのものに有機的連関が求められている。ミサ曲はまず典礼のためのものであるが、ここではそうした機能を越え、音楽的にも自律した存在へと発展していく様子が見取れる。これは、ミサ曲の担い手が高度の音楽的能力を持つ人々であった証左でもある。組ミサやミサ・サイクルにおける様々な音楽的連関は、ミサ曲を音楽作品として認識していたことの現れであり、ここから多声ミサ曲はルネサンス期の最も重要な音楽形式として大輪の花を咲かせるのである。